

# 人生で一番大きいもの

泉 大輔(24歳)

アイ・エイチ・アイ マリンユナイテッド  
呉工場船舶海洋設計部

構造生産設計に在籍する私は、設計部が作成した図面の意図を現場(製造部門)の人がわかるように、具体的な作業の流れを作る仕事をしています。具体的に部品名を入れたり、溶接の手順を書き入れたり、わかりやすく言うと、プラモデルの取扱説明書を作成しているようなものです。

これまで船を造る鉄板の発注担当、図面のCADオペレーター、構造設計図面の作成などを経てきました。今のポジションは、それら全ての経験を生かすことができます。設計の上流から下流までをおおよそ把握できるようにになったので、設計図を見れば完成した船がイメージでき、そこから、必要な材料、製造行程、どうしたら造りやすいかなどを推測することができます。

「しかし、なかなか思ったようにはいきません。見込みがあってもできなかつたり、なくてもできたり…。それらがまた新たな発見につながるから、仕事って楽しいんです」と、今の私は胸を張って言えます。しかし組

革研に行くまでの私は、仕事から目をそらすような怠惰な日々のなかにいたのです。

## “糧を得る手段”だと 錯覚していた

「人は働かなければならない。一日に十時間、週に五日間、六十歳までは働きます。人生の一番いい時代の大半を仕事をして過ごします。つまり、どんなふうに働くかで、人生が決まってしまう。いいですか、遊びがおもしろくて仕事がつまらないんです。仕事は自分のかわりかた次第で、いくらでもおもしろくできるんです」というキャンペーンリーダーのお話の中で、私は冷汗と軽い震えをもよおして、頭のなかが真っ白になりました。

現業で手一杯になると、「キヤパを超えそうかな」と早め自分で判断し、仕事を受け流していた自分。出勤すると朝から「今日一日、早く終わらないかな」と考え、「やりたくない、やりたくない」と人に振ることを考えていた自分が、初めて見えたのです。

本来の私は好奇心が強く、興味を持つと目や心を向けずにはいられないタイプです。しかし仕事は「対象外」でした。「生きているのは楽しい、仕事以外はね。仕事はお金を得るための手段だから」。こうして入社した時から、仕事は「こなす」という感じでした。一年も経ち、会う人にも見るものにも発見がなくなると、毎日が同じ作業の繰り返しとなつて、色褪せていくばかりでした。思いもよらぬことでしたが、一番輝いている時間を、危うく捨てる場所だったのです！

ショックはそれだけではありませんでした。『ロボット症』の話を聴くと、「私がやってきた仕事は、ロボットでもこなせるじゃないか。仕事のなかで人間として生きていかなかった!」と、さらに打ちのめされたのです。

日を追うごとに、自分が昂ぶっていくのがわかりました。挑戦して乗り越えるために、普段では出ることのない力が出ていく、という感覚でした。いや、「仕事では出さなくていい」と自分で決めつけ、封じ込めてい

た感覚です。「すべて自分の問題だ。問題意識を持っていなかった。問題意識こそが自分の力を引き出すポイントなんだ!」。

組革研から一か月が経ちました。「人でなければできないところは、僕でなければできないところは、どこだろう」と考えています。そして、いろんなところに首を突っ込むようになりました。図面を見ても、ちょっと視点を変えて「実際にこれでいいのかかな?」と提言したり、アレ?と思うところがあると、自分の担当外であっても、すぐに作業を止めて担当者に質問に行っています。わからないまま後工程に流したら、自分のためになりません。

船舶海洋設計部は仕事が広範に及んでいます。まだまだ私に見えていないだけで、これから見つけて、極めて、変えられるところがたくさんあるはず。組革研で私は、自分の引き出しが思っていたよりたくさんあることを確認できました。こんな力も、あんな力も、もっと引き出しを増やしてとことん勝負していきます。